

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

白子千す空と海との狭間にて

刘谷 志津選

渡邊ゆかり

〔評〕白子は通常「ちりめんじゃこ」とも言われ、イサギ、真鯛、片口鯛などの幼魚の混ざったものと記されているが、私がいつも買っている釜出しちりめんは、エビ、イカ、カニ、サバの幼魚が混ざっている。と書いてある。これは南国市浜改田で取れた白子で、昔、句友と吟行として出向いたことがある。あの浜の記憶が鮮明に浮かぶ。まず、浜岸近くの大釜に、湯が沸きかえっているのに目を引かれた。海の方から取れたての白子が運ばれてきて、湯の中へ。そこに大量の塩を入れて、さつと茹で上げ、砂浜に干し並べて行く。「空と海との狭間にて」の通り、青い海、頭上の青い空、青と青の真ん中に白子の白が際立つ。青と白の取り合わせにより新鮮でさわやかな景色が浜辺に溢れる。

青空の風花類に遊ぶくる

森岡 照月

〔評〕風花とは、晴天にちらつく雪のことで、「かぜはな」「かざはな」とも言う。一番美しいのは「かざはな」で、冬の季語として特に好まれている。ちなみに、高浜虚子の「ひねもすの風花淋しからざるや」、秋櫻子の「風花や波路の果ては空青き」がある。作者の句のように風花は青空から、また日差しをまといながら降ってくる。雪の少ない当地でも、たまに舞い来る風花の景色に淡い郷愁がよぎる。青い空から下りてくる風花が、「類に遊ぶくる」との新しい感覚で捉え、愉快に楽しく詠み上げた佳句。

砕け散る白波岩の沓え返る

竹崎たかひろ

〔評〕広々とした海原の岸に峙つ海石。海に突き出た岩に寒波が激突し、砕けて白波となって散る。この白波を花にたとえて「波の花」とも言う。土佐日記に「海荒げにて波の花咲けり」との一節もある。波の花は快晴で、風の強い日に波が風にもまれて白い泡となり、泡は広がり、白い花が咲いたようになる。これが波の花。沓え返るは、春になっていったん緩んだ寒気が、ぶり返すことを言う。早春の季語であり、寒波が打ち寄せて、荒寥とした岩場の中に咲く波の花が砕け散る厳しい寒さ

が染み透り、激しい怒涛も見える。

入選

過疎となる歴史見詰めて寒椿

大川 節弥

〔評〕年ごとに山里の過疎化が進んで行く。致し方ない現況である。代々大切に築かれてきた貴重な歴史を置き去りにして、今は残された寒椿が静かに見守っている情景がよく見え、残された自然への愛着も伝わ

金曜日もうすぐ二月鬼笑う

片岡 包女

〔評〕「金曜日」は一月二十六日で、あと五日もすれば2月。そして3日の節分、立春へと続く。節分には鬼打ち豆をまく。「鬼笑う」の鬼は自身のこと。日一日と春へ近づく事の嬉しさを「笑う」と表現。待春の感が伝わる。

重ね着が重たくなりし峠かな

東谷 晴男

〔評〕防寒のため、重ね着をして峠越えをした。峠に差し掛かると疲れも加わり、重ね着が重くなり、「重くなりし」と詠む。平明な表現に深い味を感じる。

遠霞記憶に母のめくら縞

川村 博子

〔評〕筆筒の引き出しを開けると、お母さんが大切にしていた「盲縞」の着物が有り、懐かしい記憶が甦る。それも今は遠い霞の彼方へ「遠霞」と「盲縞」との取り合わせの光る一句。

一句抄

白梅につづく紅梅観世音

津田 久美

一月のスーパームーン写メをとる

平野 洋子

早春の龍馬マラソン友来たる

石原 静

節分の鬼役走る保育園

岡村 嘉夫

冬の雨ころび見回す人の影

片岡 包女

寒椿己が在所の標かな

大川 節弥

冬薔薇数多咲かせている出窓

東谷 晴男

風を行くマフラーに顔溺れさせ

刘谷 志津

次題「当季雑詠」

締切/毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1

☎893-1922

有料広告

やまおか眼科

院長 山岡 昭宏

いの町新町20-1

TEL (088) 893-5161

■日帰り白内障手術

■OCT (光干渉断層計)

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:30	○	○	○	○ 13:00 まで	○	○
午後 2:00~5:30	○	手術	○	△	○	▲

▲第2、4土曜日 午後1:30~4:00

▲第1、3、5土曜日 午後休診

休診/木曜午後 日曜祝日